

09/03/16

ドラマリー・デイニング
銀河鉄道の夜
宮沢賢治

語り1

語り2

ジョバンニ

カムパネルラ

人びと

受付

母

牛乳屋

ザネリ

学者

鳥捕り

燈台守

老人

車掌

マルソ

カムパネルラの父

一、午後の授業

青年
男の子(弟・たあちゃん)
女の子(姉・かおる)

姉

語り 先生は、黒板に吊した大きな黒い星座の図の、上から下へ白くけぶつた銀河帯のよ

うなどころを指しながら、みんなに問をかけました。

先生 「ではみなさんは、そういうふうに川だと云われたり、乳の流れたあとだと云われたりしていたこのほんやりと白いものがほんとうは何かご承知ですか。」

語り カムパネルラが手をあげました。それから四五人手をあげました。ジョバンニも手をあげようとして、急いでそのままやめました。(たしかにあれがみんな星だと、いつか雑誌で読んだのでしたが、このころはジョバンニはあるで毎日教室でもねむく、本を読むひまも読む本もないのに、なんだかどんなこともよくわからないという気持ちがするのでした。

語り ヒトちゃんが先生は單身者を見付けたのでした。

先生 「ジョバンニさん。あなたはわかっているのでしょうか。」

語り ジョバンニは勢よく立ちあがりましたが、立つて見るともうはつきりとそれを答えることができないのでした。ザネリが前の席からふりかえって、ジョバンニを見てくすつません。

ジョバンニ

カムパネルラ

ラストもとしまわせ?

とわらいました。ジョバンニはもろどぎまぎしてまつ赤になつてしましました。先生がました。

先生 「大きな望遠鏡で銀河をよつく調べると銀河は大体何でしよう。」

語り やっぱり星だとジョバンニは思いましたがこんどもまた答えることができん

語り 先生はしばらく困ったようすでしたが、眼をカムパネルラの方へ向けていました。

先生 「ではカムパネルラさん。」

語り すると、あんなに元気に手をあげたカムパネルラが、やけにもじもじ立ち上つたまま答えができませんでした。先生は意外なようにしばらくじっとカムパネルラを見ていきましたが、急いで

先生 「では。よし。」

語り と云いながら、自分で星図を指しました。

先生 「このぼんやりと白い銀河を大きな望遠鏡で見ますと、たくさんの小さな星に見えるのです。ジョバンニさんそうでしょう。」

語り ジョバンニはまつ赤になつてうなずきました。けれどもいつかジョバンニの眼のな

かには涙がいっぱいになりました。

ジョバンニ 「そうだ僕は知っていたのだ、勿論カムパネルラも知っている、それはいつかカムパネルラのお父さんの博士のうちにカムパネルラといっしょに読んだ雑誌のなかにありました。」

語り それどこでね、カムパネルラはその雑誌を読むと、すぐお父さんの書斎から巨きな本をもつてきて、ぎんがというところをひろげ、まつ黒な貞いいっぱいに白い点々のある美しい写真を一人でのまでも見たのでした。それからカムパネルラが忘れる筈もなかつたのに、またに返事をしなくてるのは、このごろぼくが朝も午後も仕事がつらく学校に出てももうみんなともはまはま遊ばず、カムパネルラをもあんまり物を云わないようになつたので、カムパネルラがそれを知つて氣の毒がつらわざと返事をしなかつたのだ。

語り そう考へるとたまらないほど、じぶんもカムパネルラもあわれなような気がするのでした。

語り 先生はまた云いました。

先生 「ですから、もしもこの天の川があまがほんとうに川だと考へるなら、一つ一つの小さな星はみんなその川の砂や砂利の粒にあたるわけです。またこれを巨きな乳の流れと考へるならもつと天の川とよく似ています。つまりあの星はみな、乳のなかに

細かにのかんでいる脂油の球にもあたるのでです。」

語り そんなら何がその川の水にあたるかと云いますと、それは真空の光をある速さで伝えるもので、太陽や地球もやっぱりそのなかに浮んでいるのです。つまりは私ども天の川の水のなかに棲んでいるわけです。そしてあの天の川の水のなかから四方を見ると、ちょうど水が深いほど青く見えるように、天の川の底の深く遠いところほど星がたくさん集つて見え、したがつて白くぼんやり見えるのです。この模型をごらんなさい。」

先生 「天の川の形はちょうどこんななのです。いちいちの光るつぶがみんな私どもの

太陽と同じようにじぶんで光っている星だと考えます。

私たるもの太陽がこのほぼ中ごろに

あって地球がのすぐ近くにあるとします。みなさんは夜このまん中に立つてこのレンズの中を見まわすとしてごらんなさい。こっちの方はレンズが薄いのでわずかの光る粒即ち星しか見えないのでしょう。こっちやこっちの方はガラスが厚いので、光る粒即ち星がたくさん見え、その遠いのはぼうっと白く見えるという、これがつまり今日の銀河の説なのです。そんならこのレンズの大きさがどれ位あるかまたその中のさまざまの星についてはもう時間ですから次の理科の時間にお話します。では今日はその銀河のお祭なのですからみなさんは外へよくそらをごらんなさい。ではここまでです。本やノートをおしまいなさい。」

語り そして教室中はしばらく机の蓋を開けたりしめたり本を重ねたりする音がいっぱいでしたがまもなくみんなはきちんと立って礼をすると教室を出ました。

二、活版所

(T 12)

語り ジョバンニが学校の門を出るとき、同じ組の七八人は家へ帰らずカムパネルラを中心にして校庭の隅の桜の木のところに集まっていました。それはこんやの星祭に青いあかりをこしらえて川へ流す鳥瓜を取りに行く相談しかったのです。

語り けれどもジョバンニは手を大きく振つてどしどし学校の門を出て来ました。

町の家々では(元や)銀河の祭りにいちいの葉の玉をつるしたりひのきの枝にあかりをつけたりいろいろの仕度をして、ものでした。(ある)

語り ジョバンニは家へは帰らず町を三つ曲つて大きな活版所にはいってゆきました。

小さな平たい函をとりだして、電燈のたくさんついた立てかけてある壁の隅の所へしゃがみ込むと、小さなピンセットであるで粟粒ぐらいの活字を次から次と拾いはじめました。

語り ジョバンニは何べんも眼拭いながら活字をどんどんひるいました。

語り 六時がうつてしまらくたつたころ、ジョバンニは拾つた活字をいっぱいに入れた平たい箱をもといちど手にもつた紙きれと引き合せました。

語り ジョバンニは小さな銀貨を一つ受け取ると、俄かに顔いろがよくなつて威勢よくおじぎをすると、台の下に置いた鞄をもつておもてへ飛びだしました。

語り それから元気よく口笛を吹きながらパン屋へ寄つてパンの塊を一つと角砂糖を一袋買いますと一目散に走りだしました。

三、家

(13)

語り 口の一番左側には空箱に紫いろのケールやアスピラガスが植えてあって小さな二つの窓口は日曜日が下りたままになつてゐました。

語り ジョバンニ「お母さん。いま帰つたよ。工合悪くなかったの。」

語り ジョバンニは靴をぬぎながら云いました。
母 「ジョバンニ、お仕事がひどかつたろう。今日は涼しくてね。わたしはずうつと工合がいいよ。」

語り ジョバンニが玄関を上つて行きますとお母さんはすぐ入口の室に白い巾を被つて寝んでいた。ジョバンニは窓を開けました。

ジョバンニ 「お母さん。今日は角砂糖を買ってきたよ。牛乳に入れてあげようと思つて。

母 「お前さきにおあがり。あたしはまだほしくないんだから。」

母 「三時ころ帰ったよ。みんなそこらをしてくれてね。」

ジョバンニ 「お母さんの牛乳は来ていないんだろうか。」

母 「来なかつたろうかねえ。」

ジョバンニ 「ぼく行つてとつて来よう。」

母 「あたしはゆっくりでいいんだから、お前さきにおあがり。姉さんがね、トマトで何かこしらえてそこへ置いて行つたよ。」

ジョバンニ 「では、ぼく、食べよう。」

語り ジョバンニは窓のところからトマトの皿をとつて、パンといつしょにしばらむしやむしやたべました。

ジョバンニ 「ねえお母さん。ぼくお父さんはきっと間もなく帰つてくると思うよ。」

母 「あたしもそう思う。けれどもおまえはどうしてそう思うの。」

ジョバンニ 「だつて今朝の新聞に今年は北の方の漁は大へんよかつたと書いてあつたよ。」

母 「だけどねえ、お父さんは漁へ出ていらないかも知れない。」

ジョバンニ 「きっと出ているよ。お父さんが監獄へ入るような悪いことをした筈がないんだ。この前お父さんが持つてきて学校へ寄贈した巨大的な蟹の甲らだのトナカイの角だの、今だつてみんな標本室にあるんだ。」

母 「この次はおまえにラッコの上着をもつてくるといつたねえ。」

ジョバンニ 「みんながぼくにそれを云うよ。ひやかすように云うんだ。」

母 「悪口を云うの。」

ジョバンニ 「うん、けれども、カムパネルラなんか決して云わない。みんながそんなことを云うときは気の毒そうにしているよ。」

母 「あの人のお父さんとうちのお父さんとは、おまえたちのように小さいときからのお友達だったそうだよ。」

ジョバンニ 「お父さんは、ぼくをカムパネルラのうちへもつれて行つた。あのころはよかつたなあ。学校から帰る途中、たびたびカムパネルラのうちに寄つた。アルコールラムで走る汽車があつたんだ。レールを七つ組み合せると円くなつて、それで電柱や信号標もついていま信号標のあかりは汽車が通るときだけ青くなるようになつていたんだ。だからアルコールがなくなつたとき石油をつかつたら、罐がすっかり煤けたよ。」

母 「そうかねえ。」

ジョバンニ 「いまも毎朝新聞を配りに行くよ。けれども、いつでも家中まだいんとしているよ。」

母 「早いからねえ。」

ジョバンニ 「ザウエルという犬がいるよ。しつぽがまるで第三のようだ。ぼくが行くと、鼻

を鳴らしてついてくるよ。今夜はみんなで烏瓜のあかりを川へながしに行くんだつて。きっと犬もついて行くよ。」

母) 「そうだ。今晩は銀河のお祭だねえ。」

ジョバンニ) 「うん。ぼく牛乳をとりながら見てくるよ。」

母) 「ああ、行っておいで。川へはほいらないでね。」

ジョバンニ) 「ぼく、岸から見るだけなんだ。一時間で行つてくるよ。」

母) 「もつと遊んでおいで。カムパネルラさんと一緒になら心配はないから。」

ジョバンニ) 「きっと一緒にだよ。窓をしめて置こうか。」

母) 「ああ、どうか。もう、涼しいからね」

ジョバンニ) 「では一時間半で帰つてくるよ。」

語り ジョバンニは立つて窓をしめ、お皿やパンの袋を片附けると、靴をはいて勢いよく暗い戸口を出ました。

四、ケンタウル祭の夜

本
は

語り ジョバンニは、口笛を吹くようなさびしい口付きで、檜のまっ黒にならんだ町の坂を下りて来た。坂の下に大きな一の街燈が、青白く立つていました。

語り ジョバンニが太股にその街燈の下を通り過ぎたとき、ザネリがえりの尖った新しいシャツを着て、電燈の向う側の暗い小路から出て来ました。

ジョバンニ) 「ザネリ、鳥瓜ながしに行くの。」

ザネリ) 「ジョバンニ、お父さんから、らつこの上着が来るよ。」

語り ジョバンニは、ぱつと胸がつめたり、そこら中きいんと鳴るように思いました。

ジョバンニ) 「何だい。ザネリ！」

語り ジョバンニは高く叫び返しましたが、ザネリは向うのひばの植つた家の中へはいつていきました。

ジョバンニ) 「ザネリは、どうしてあんなことを云うのだろう。ぼくがなんにもしないのにわんなことを云うのはザネリがばかだわ。」

語り ジョバンニは、さまざまの灯や木の枝で、すがりきれいに飾られた街を通つて行きました。

語り 時計屋の店には明るくネオン燈がついて、一秒ごとに石でこされたふくろうの赤い眼が、くるくるつとうごいたり、いろいろな宝石が海のような色をした厚い硝子の盤に載つて星のようにゆつくり循つたり、また向う側から、銅の人馬がゆつくりこつちへまわつて来たりするのでした。そのまん中に円い黒い星座早見が青いアスパラガスの葉で飾つてありました。

語り ジョバンニはわれを忘れて、その星座の図に見入りました。

語り それはひる学校で見たあの図よりもずっと小さかつたのですがその日と時間に合せて盤をまわすと、そのとき出ているそらがそのまま橢円形のなかにめぐつてあらわれるようになつて居りやほ。そのまん中に上から下へかけて銀河がぼうとけむつたような

りましん。

刻

絃
9